

時は某年の3月初旬、雪解けが大分進み、どんどん春へと向かっているのがわかる。

ボクは今日のバイトも終わり、自宅への帰り道にいつものコンビニへと寄る。

今日の晩御飯と、お菓子を買いに。

と、そこへボクの携帯にメールが来た。

彼女からだ。

時計を見ると、午後10時15分。

あ、そうか…今日は家に彼女が来ているのだった。

なんでも新しい料理を考えついたから、試してみようというのである。

要は毒見役だ。

彼女は一人っ子で、両親とは仲が良いのではあるが、両親とも大学の助教授で、それぞれ何かの研究をしているらしく、遅くなることや、その日には家に帰らないことも多いそうで、一度に家族が揃うことがほとんどないらしい。

彼女の自宅に両親ともいないときは、なにかしら理由をつけてボクの部屋にやってくるのである。

今日は、どうもそうだったことではないらしいが…

ということで、本来なら晩御飯を買わずに済みそうなものだが、保険ということでカップラーメン2つほど買うことにしよう。

そして複数のお菓子と、ペットボトルのジュースも買い、帰りをせかす彼女の待つ自分の部屋へと向かった。

先ほどのメールからさらに3回もメールが来ているのだ…。

ボクの名前は、カスガ。

A市の普通の家庭で育ってきた、なんてことはない三流大学の2年生。

両親ともに健在で、兄弟は弟が一人。

特別に苦勞せず、勉強も遊びもソコソコに、部活はせずに、結構気ままな生活を送ってきた。

ただ将来なりたい物が明確に見つけられず、それを見つけるために今の大学に入った。

実はA市よりも都会であるS市に上京したいが為に大学に入ったようなものなのだが、その為には一人暮らしをしなければならず、一応実家からのそれ相応の仕送りももらっている(つもりでいた)が、仕送り金が家賃、光熱費ですべて飛んでしまうという…

アパートの間取りは2DKで、8畳と6畳という広さ、家賃は5万円、備え付けのストーブはガスストーブなので、やたらとガス代が掛かり、光熱費で2万円を越すこともある。

これでさらに月極駐車場の駐車料金が1万2千円が消えていくという…。

物価の高いS市での生活は楽なものではない。

その為に、人並みな生活を送るためには、週に5日も学校が終わった後にアルバイトをしなければならない。

その週5日、1日4時間のアルバイトで稼げる毎月の給料が、交通費含め約7万円。

まだありがたいのは、親からお下がりでもらった車があることくらいである。

一人暮らしの学生という身分で、自動車を持っているのはかなり強いことで、便利であることは間違いない。

ガソリンさえあればどこにでも行けるから。

そのアルバイト先で知り合ったのが今の彼女。

名前はミュキ。

黒髪で、若干クセのある髪が、肩に掛かるか掛からないかぐらいの長さで、化粧もあまり濃くなく、かといって箱入り娘でもない、得に変哲の無い19歳の女の子だ。

背の高さも私よりは低いものの、それほど小さくも無く、スタイルも決して悪くない。

ボクから見分には決して悪くないラインだが、本人曰く全然ダメとの事。

顔は美人系ではないが、磨けば光るって感じがする。

濃い化粧をしないため、他の女の子に比べると素朴な感じを受けるのかもしれない。

一度「バッチリメイク」でのミュキを見てみたいと思っているが、本人にはその気が無いらしい。

決して世に言う「ブサイク」ではない。

性格的には、マジメ且つ単純。

その辺の同世代の女の子と同じくおしゃれもする、ごく普通の女の子である。

バイト先は工場内での流れ作業ということから、話しながらの作業も出来るため、仕事中でもコミュニケーションはとることができた。

その中でボクがミュキをからかう度に、ミュキは本気になって怒り出し、結局ボクから謝るとというのが基本パターン。

その単純さがかわいく感じ、少しずつ気になっていたところ、いきなり彼女から交際を切り出されたのが付き合いきっかけだった。

そして、そろそろミュキと付き合い始めて1年が経とうとしていた。

自分の部屋のドアの鍵を開ける。

ガチャっ。

「おかえり〜。待ってたんだから〜。」

「おう、ただいま〜。はい、おやつ。」

「あ、おやつだけじゃないじゃん！ご飯あるのに！」

「違うっての。カップ麺切らしててさ。」

と、まあ、先にミュキがいるときは、大体こんな感じ。

おやつを持ってニコニコしながら奥に行くミュキ。

ここまでは何も変哲が無いな…。

いや、いつもと来るきっかけが違うので、ちょっと気になるところ。

まだ付き合い11ヶ月だが、ほとんど毎日会っているし、週に1、2度はこうやってボクの部屋にいるのである。

大体のクセやパターンは分かっているのだ。

今日は別に両親が自宅にいないというわけでもないみたいだし…ボクがなにか忘れ物でもしたのであろうか？

…ミュキは忘れ物、忘れ事としていると、妙に突っ込みが激しいから…。

と、ミュキがなにか言ってきた。

「もう少しでホワイトデーだねえ。」

…

そうだった。

バレンタインデーのときに、約束していたことがあったっけ。

バレンタインデーにデートをしたのだが、その時について調子に乗って、「ティファニーの限定ネックレスをホワイトデーにプレゼントする。」なんて言ってしまったのだ。

貧乏学生にはキツイ…ただでさえ生活費はカツカツなのだから。

…ん？…話が續かないな…やっぱりなにかあるのだろうか？

…

「それよりも見て！ジャジャヘンだよ。」

ミュキがテーブルの上を指差して、ニコニコしながら言った。

なんとまあ…豪勢に作り上げたものだ…。

コーンポタージュ、ハンバーグステーキ、オードブル、サラダ盛り合わせ、そして赤ワイン。

しかもどこから持ってきたのか、キャンドルまで立てて豪勢に盛り立ててあるのだ。

ホントになにかがあったのだろうか？

しかしホントに料理好きだな…作るのが好きというか、服とかも自分で作るらしい。

というより、ミュキは現在フリーターなのだが、ファッションデザイナーになるという夢も持っている。

専門学校などには通わずに夢を実現するというこだわりもあり、独学で色々とかんがっているのだ。

その姿は目を見張る物がある。

実際ボクも手作りジャケットを誕生日にもらった。

これがなかなか良くできていて、デザインも良く、様々な組み合わせもしやすいので、なんでもない日でも時折着ているのだ。

「随分と豪勢だねえ。なにかいいことでもあったの？」

ボクはミュキに聞いてみた。

ちょっと覚悟して。

「まあね！詳しくはご飯食べてから話すよ。」

今日のミュキはずっと笑顔…やっぱり笑顔が一番だな…ミュキは。

最初は気になっていただけの彼女だったのに、知れば知るほどミュキの事がどんどん好きになっている。

ミュキはボクの事をどう思っているのであろうか？

なんだか今日は色々と考えてしまうな…。

「ねえ、どうしたの？早く一緒に食べようよお。もうホントに冷めちゃうよ！」

「あ、ゴメンゴメン！」

と、豪勢なテーブルを、ミュキと向かい合わせになって囲んだ。

向かい合わせ？

今までは向かい合わせになったことが無いな…気の回しすぎじゃない…。

ミュキは、「隣り合わせに並んだ方が、安心感があるから好き。」という理由で、小さいテーブルなのに擦り寄るように並んで一緒に食べるのである。

…今日は何かがあるな…やっぱり覚悟しておこう。

そしてスープを一口。

…

「なんじゃこりゃ!？」

思わず口にしてしまった。

コーンポタージュかと思いきや、やたらと甘みがある。

ミュキがすかさず反応した。

「え、パンプキンスープ嫌い？」

…うん、今飲んで知ったよ。パンプキンスープだって。

薄暗くて、色がよくわからなかったからさ…。

「あ、そうか、カボチャね？てっきりコーンポタージュかと思ってたからさ。」

「もう！失敗したかと思ったじゃん！それが新作料理じゃないんだからね！新作はこれっ！」

と言って、ミュキはハンバーグを指差した。

「中に何かが入ってるのか？」

ボクは普通に聞いてみた。

「それは食べてからのお楽しみ。」

…やっぱりそう言ったか。

「食べて、いきなりボクが死んだりして？」

ボクはいつものように冗談っぽく言ってみた。

するとミュキは顔をいたずらっぽくさせて、

「さ、どうかな…」

うん、いつものミュキだ。

安心しつつ、そのメインディッシュの新作ハンバーグに手を伸ばす。

…

ナイフとフォークでハンバーグを切り分ける…今のところ異常なし。

切り取った部分を、フォークで口に運んだ。

…

うまい！これはホントにうまい！

ボクの明らかに驚いたその顔を見て、ミュキはニコニコしながらこう言った。

「おいしいでしょ〜。アイにコツを教えてもらってさ、試してみたんだよね。」

アイちゃんとはミュキの小学校のときから親友で、何度か会ったことがある。

かなり可愛い子で、美人顔というよりもかわいい感じの顔、それに似つかわずセクシーなボディライン、そんなセクシーな彼女、恋愛経験はミュキよりも多い。

ちなみにボクは、ミュキが二人目の彼女である。

ミュキと付き合う半年前に、同じゼミの女の子で、ボクから告白をして付き合い始めた彼女がいたのだが、ものの1ヶ月で「カスガはつまらない。」という理由で、あっさりフラれてしまった。

やっぱり最初の彼女ということもあってか、ボクが緊張していたところもあったし、なにをどうしていいのかわからないところもあって、そしてその時の彼女は既に経験豊富だったため、ボクのことが「つまらない男」ということになってしまったのであろう。

…とりたい。

なんだかんだ楽しく会話しながら、ミュキの作った「豪華料理」を平らげていた。

ホントにおいしかった。

ミュキはニコニコしながら、食べ終わった後の食器を洗ってくれている。

ニコニコ…というよりも、ニヤニヤだな…。

ホントにいい事があったみたいだ。

ミュキはホントに単純なので、すぐに顔に出るのだ。

「ねえ、今日はどんないい事があったんだい？お姫様？」

「ちょっとお待ちください。これ片付けちゃうから。」

お、なんだか気を引き締めたのか？

笑顔は…相変わらず…に見えるけど…。

「はい！お片づけ終了！よしよし…」

ミュキが洗い物を片付け終わったようで、テレビを見ながら待っていたボクの隣に、いつものように擦り寄ってきた。

「ねえ？ピッキリさせてもいい？」

「え、なんだよ…気になるような言い方して。」

「え？そんな風に聞こえた？」

…あ、ボクが敏感すぎたな…。

「え、あ、いや…TV結構真剣に見てたからさ。」

「あっそ！是非聞いて欲しいことなんだけどなあ。」

と、その時ミュキの顔を見ると、真剣な顔をしている。

ドキっ…いや、ゾクとした。

「あのね、実はね…」

ゴクッ…

「赤ちゃんが出来たの…なんて言ったらピッキリする？」

と、ニヤつきながらボクに言ってきた。…まったく…

「びっくりするけど、そうじゃないんでしょ？」…クールに答えるボク。

「…つまんな〜い…もっと反応してよっ！」

「その手、何回使ってるのさ？」

笑いながらボクはそう答えた。

「今のは冗談だけど、ホントは…」

「ホントは…何さ。」

「この間ミュキが作った服を雑誌主催のコンテストに出してたのね。」

ミュキはこういったコンテストがあるごとに出品している。

ボクが知っている中で、これまでの戦績は、13戦13敗。

「それがね、今日雑誌社から手紙が来てね、ミュキのが優秀作品賞に決まったって！しかも取材させて欲しいって言うのよ！」

なんと、本当に朗報じゃないか！

「やったな！ボクもミュキはいつかやるんじゃないかって思ってたけど、ホントにやったな！」

正直本当にうれしかった。

「うん！やっただよ！でも…」

…でも？

「…でも、その取材の日が、3月14日なの…日付の変更は出来ないんだって。」

ミュキは悲しそうな顔をした。

…そんな事かい…できればそりゃホワイトデー当日にプレゼントは渡したいけど…。

まだ買ってないけどさ…。

「そりゃ仕方ないじゃん。チャンスだろ？ちゃんと行ってこいよ。別にホワイトデーなんかずらしてもいいじゃん。」

「嫌だよ！イベント事は大事なの！」

…くだらねえ…。

「ミュキの夢じゃん、ファッションデザイナーになるの。ミュキは学校に行かずにしてチャンスを掴もうとしてるんだぜ？

そっちに行くべきだよ。」

ミュキは考え込んでしまった。

目に涙を浮かべて。

…困るんだよ…涙見せられるとさ…。

「ボクの事だったら大丈夫だからさ、変なところこだわると、できる物もできなくなっちゃうぜ？」

ミュキはうつむいたままだが、小さくなつたようだ。

「…わかった。取材受けてくるよ…困らせてごめんね。」

ミュキが静かに抱きついて、ボクの肩に顔をうずめた。

ボクも静かにミュキを抱きしめた。

…

それから数日後、ホワイトデー当日となった。

今日はボクも大学、バイト共に休みということで、駅まで車で送ることとなった。

お互いに不安な気持ちもあったのであろう、自然な話の中でそれは決まってしまった。

本当は現地まで送りたいかったのだが、それはミュキの方から「余計に緊張するから」という理由で断られてしまった。

プレゼントもなんとか、やり繰りして買えたので、取材直前に渡せたらと思ったのである。

ミュキの元気づけも兼ねて。

仕方が無いので、別れ際に渡すことにしよう。

それにしても今日のミュキはしゃべらないなあ。

いつもなら、一人でべちゃくちゃ喋っていたり、カーオーディオに合わせて熱唱してたりするのに。

やっぱり緊張しているらしい。当然だが。

ボクも同じ立場なら、ミュキ以上に緊張するだろう。

ミュキの家から駅までは車で15分ぐらいは掛かる。

取材の時間まではまだまだあるので、少し遠回りをして気を解してあげようかと思っていたが、どうもボクまで緊張してきたらしい。

気の利いたことが言えない。

「…あ、今日はいい天気…ですね。」などとベタベタな、気の利かない言葉しか出てこないのである。

そしてそうこうしているうちに、駅に着いてしまった。

気の利いたこと一つも言えず、そのままミュキが車から降りようとしていた。

あ、プレゼント渡さなきゃ！

「あ、ミュキ、待って！」

ミュキがビックリして振り向いた。

ボクはあわてて車から降りて、ミュキの目の前に駆け出した。

「ど、どうしたの！？変にドキドキしたじゃん。」

ボクはあわててプレゼントを…あ！車内だ！

ボクはさらにあわてて助手席のドアを開けた。

ガツツ！

助手席のドアが思いっきり縁石にぶつかった。

それに構わず、グローブボックスを開けた。

買ってからずっとそこに隠してあったのだ。

ミュキの希望通り、ティファニーの限定ネックレス。

高かったよ…貧乏学生に1万8千円は…。

しかも一人でティファニーまで買いに行くのも恥ずかしかったよ…。

「あ、ごめん…ハイ、これ…」

ぜえぜえ言いながら、ミュキに手渡した。

ミュキは非常に不可解な顔をしている。

…当然か。

「…開けてもいい？」

「…うん、…いいよ。」

と、ボクが言いかけているときには既に開けられようとしていた。

おいおい…。

ミュキは一気に明るい表情になり、ニコニコしてボクに抱きついてきた。

「アホ！公衆の面前だぞ！」

ミュキはあわてて僕から離れて、照れくさそうに、

「ホントに買ってくれたんだね！欲しかったんだあ」

ミュキはホントに喜んでいる。

よかったよかった…。

「ありがとう！カスガ！」

「大事にしるよ～貧乏学生にはなかなかにつかったんだから。」

ボクは笑いながらミュキに話した。

ミュキも笑ってる。

よかった…緊張を解すことにも成功したみたいだ。

ボクもミュキも。

「じゃ、行って来るよ！プレゼントのおかげで元気ももらったし。」

「おう、じゃ、がんばってこいよ。」

お互い小さく手を振りながら、この場を別れた。

ミュキは自分の夢にまっすぐ進むように、駅に向かって歩いていった。

そしてボクは、その前向きなミュキの背中をただ見つめていた。

非常に微かな胸騒ぎを感じながら…。

ボクはそれから自宅へ帰り、のんびりとしていた。

ミュキを迎えに行くまでには、まだまだ時間があるし、かといって何かをしようにもお金が無いのである。

それくらい今回のプレゼントへの出費は痛いものがあった。

でもプレゼントを見たときのミュキの喜んだ顔…本当にいい顔してたな。

ホントに欲しかった物だったからかな？

とりあえずまだまだ時間があるので、TVゲームでもやって暇つぶしでもしよう。

なかなか消化できていないソフトが沢山あるのだ。

とはいっても、これがなかなか消化できない。

どうも飽きてしまうのだ。

高校生の頃はそんなこと無かったんだけどな…これも大人になったからかな？

2時間経過…だめだ…やっぱり飽きてしまう。

今度はビデオでも見ようか…

トゥルルルルル…

あ、携帯が鳴っている。

誰からだろう？

…非通知？

普段なら非通知着信は出ないんだけど…

「はい、中野です。」

「…中野カスガさんのお電話でしょうか？…私、ミュキの母です。」

…なんと、ミュキのお母さんからだ。

なんでボクの携帯番号知っているのであろう？

もしかしてミュキの身になにかが！？

いや、それは考えすぎだな。

でも一体なんだろう？

「カスガさんなら何かご存知かと思ひまして…実はミュキには内緒で携帯電話に入ってる電話番号全部を控えさせてもらっていたのです。」

…チェック厳しいのね…かなり…今後が怖いかも…。

「で、どうかされたんですか？」

「今ミュキはどこにいるのですか！？」

…やっぱり。

でも取材のことは両親に内緒だったのかなあ？

これはみんなで大喜びできると思うんだけど…。

これは話すべきか…話さないべきか…

ミュキの話では、両親は協力的だって聞いていたのに…ちょっと違うような？…

でもここは、ミュキを信じて話してみよう。

「ミュキは先日ファッションのコンテストで入賞したとかで、今日はその取材を受けに出掛けてますよ。」

「！…取材って…あの子ちゃんと調べなかったんだわ！」

…！…

それは一体どういうことだ！

「私ミュキに話したんです。コンテスト入賞ぐらいで取材なんておかしいって。」

「それってどういうことですか？なにか知ってるんですか？」

非常に心配になってきた…。

「それがわからないんです。一応その取材するって会社も、かなり大手のファッション雑誌の会社みたいですし…。でも今日はなにも言わずに出て行ったんですよ。心配で心配で…」

なんだ…単なる過剰な心配だったか…。

「わかりました。あとでミュキを迎えにいくのに連絡が入りますので、ミュキから連絡がありましたらボクからそちらに電話しますよ。」

「そうですね！？ありがとうございます！」

軽くミュキのお母さんをなだめながら、連絡先を教えてもらい、ミュキからの連絡を待つことにした。

ミュキからの連絡が無い限り、どうしようもないからだ。

お母さんもお母さんで心配性みたいで…思わずボクも余計な心配をするところだった。

さ、DVDでも見ようっと。

…そして1時間後。

トゥルルルルル…

あ、携帯が鳴ってる！

ミュキのお母さんからだ。

「はい、カスガです。」

「あ、カスガさん！大変なんです！ミュキが…ミュキが！！」

え、ミュキが！？

「どうしたんです！？ミュキになにかあったんですか！？」

「ミュキが、交通事故で…重体だって…！」

…ボクは愕然とした。

とても信じられない…嘘だろ？

待て、冷静に、ここは冷静に…！

「病院はどこなんですか！？病院に行かないと！」

「…病院は、S医大付属病院です…私…どうしたら…」

「お母さん今どこですか！？」

「…家です…どうしたらいいか…夫は連絡つかないし…」

「ボクがそちらに迎えに行きますから、一緒に病院にいきましょう！待ってください！」

ボクはそいって電話を切り、上着と鞆と鍵を手に車におかかって部屋を飛び出した。

すばやく車に乗り、エンジンキーをひねる。

ククク…ブォーン！

一気にアクセルを踏み込み、周りなどお構い無しにミュキの家へと猛スピードで走った。

ミュキ…なんで交通事故なんかで…また信号の無いところでも横断したんだろ…いつも言ってるのに…

通常20分かかるミュキの家まで、なんと10分でミュキの家に到着、すぐにミュキのお母さんを乗せ、S医大付属病院へと向かった。

助手席でミュキのお母さんは、ずっとしゃっくりをしながら泣いている。

その様子を見てとても声を掛けられない。

きっとボクよりもショックだろう…実の親である。

その気の毒な様子を見て、ボクは少し気を取り直した。

ミュキのお母さんをなだめつつ、荒れ気味だった運転も控えめになり、ボクの気持ちも少しだけ落ち着いた。

もう少しで病院だ。

もう少しだよ！お母さん！…ミュキ、もうすぐだからね！

病院が見えてきた。

ボクは落ち着いて病院の駐車場に入り、駐車券を受け取り、きっちり駐車スペースに車を停車させた。

ボクとミュキのお母さんは、小走りですぐに病院に入り、受付でミュキのことについて問い合わせた。

受付に問い合わせたところ、ただいま手術中との事。

ミュキのお母さんが、手術室の前で待とうということで、受付で手術室の場所を聞き、早速手術室へと向かった。

廊下を小走りで歩き、手術室にたどり着いた。

“手術中”のランプが点灯されている。

まだ手術が始まってから、あまり時間が経ってないらしく、人の出入りが激しかった。

「ミュキは！ミュキは！」

ミュキのお母さんは、出入りする看護婦に話しかけるが、「落ち着いてください。」の一点張りの返答に、悲しさと悔しさを隠せずにいた。

先ほどまでなんとか冷静を保っていたボクも、その様子を見てさすがに苛立ちを感じ始め、同じような行動をしてしまいそうなところをギリギリで我慢した。

ミュキ…がんばれ…ミュキ…！

そうこうしていると、一人の中年男性がこちらに駆け込んできた。

「あなた！」

ミュキのお父さんらしい。

「ミュキは！？」

「今手術中なの…まだ始まってから20分ぐらい…私どうしたらいいか…」

ミュキのお母さんは、お父さんの登場で一気に緊張が解けたのか、お父さんの胸元で泣いている…。

「大丈夫、大丈夫だ。ミュキはなんとかなる！」

ミュキのお父さんは、お母さんを励ましていた。

…ミュキのお父さんはボクに気づいたようだ。

「…キミがカスガ君かね？」

「はい、ミュキさんとお付き合いしてます、カスガといいます。」

「そうか…良さそうな青年でよかった…よく来てくれたね。」

ミュキのお父さんは、なんて強い、しっかりした人なんだろう…

ボクが同じ立場なら、慌てふためいて全く落ち着きがないだろうに…。

「ミュキはカスガ君のことをあまり話さなかったが、逆にそれで安心していたんだ。それまでのミュキはその時お付き合いしていた男性のグチばかり話していたものでね、カスガ君に関してはそれがないから、あまり心配してなかったのだよ。」

ホントに立派なお父さんだ…この発言はボクのことを認めたということだろうか？

いや、その前に今はそんな状態ではない…とにかくミュキの無事を祈ろう…。

いつの間にか、ミュキのお母さんは落ち着いてベンチに座っている。

まだ手術中のランプは点いている。

当然か…まだ手術を開始してから30分足らずだ。

重体と聞いているので、まだまだ時間が掛かるだろう。

よくドラマとかでは、8時間とかかけて手術したっていう台詞もあるし、まだまだ掛かるだろうな…。

ガチャッ！

いきなり手術室の観音開きのドアが開き、手術を担当したであろう先生が出てきた。

「ご家族の方ですか？」

「はい。」

思わず返事をしてしまった。

しかし、ミュキの両親ともそれどころではない。

これから先生が話そうとすることに集中しているのだ。

なんだか嫌な予感がしてきた。

「ミュキさんは脳挫傷と、大腸、小腸が破裂しております。縫合手術をこれから行いますが、あいにく血液が足りません。ご家族の方でミュキさんと同じ血液型の方はいらっしゃいますでしょうか？」

そうだった…。

ミュキの血液型はO型のRH-型…10万人に一人といわれる「RH-型」なのである。

血液バンクにも殆どないであろう。

ここはボクの出番だ…。

ボクも「O型でRH-型」なのだ！

「ボクが同じです！O型のRH-です！」

お母さんもお父さんも驚いていた。

「カスガさん、あなたミュキと同じ血液型なの！？ミュキを助けて！」

「カスガくん！お願いできるか！？」

ボクは意を決して、無言で頷いた。

そしてボクは、先生と一緒に手術室へと入っていった。

手術室では先生の的確な指示で、採血の準備が行われた。

ミュキはどこであろうか？

パーティションがあるので、その向こうであろうか？

手術台の照明台が若干見える。

「かなりの血液を取るからね、気をしっかり持つように。」

先生がやってきて、ボクに話しかけた。

「はい、大丈夫です。」

かなり不安で逃げ出したい気持ちではあるが、ボクの血液でしかミュキは救えない。

ミュキは救えないのだ。

看護婦さんが僕の腕に消毒の脱脂綿をこすりつける。

そして注射針が刺された。

ボクはとにかく耐えた。

ミュキの為に。

しかし本当に沢山血液が取られているようだ。

気のせいか眠く、そして軽い眩暈が僕を襲った。

そう、たぶん気のせい…気のせい…

…

遠くから声が聞こえる…

…

「…カスガクン…気を…持っ……スガ………」

…

ボクは気を失った。

ボクは目を覚ました。

白い天井、どうやら病院の一室みたいだ。

どれくらい気絶していたのであろう？

気絶する寸前の記憶が全く無く、現在何時なのか、どれくらい寝ていたのか全く見当がつかない。

そうだ！ミュキはどうなったのであろう！？

起き上がろうとしたが、あちこち身体が痛い…なんでだろう…

そして非常にだるい…沢山血液を採られたからであろうか？

また眠くなってきた…

…

少し経って、ボクは再び目を覚ました。

まだ身体がだるい…。

そこへ壁の向こう？

ドアの向こうあたりだろうか？

声が少しだけ聞こえる。

…

ダメだ…言葉として聞き取れない…

でも話し合っている相手は、なんとなくわかった。

ミュキの両親と、担当の先生らしい。

…

ミュキのお母さんがヒステリックになって叫んでいるのが聴こえるが、言葉が聞こえない…。

何？どうしたんだ！？

それをなだめる声も若干聞こえる…。

一体なんの話をしているのであろう？

なんとも身体がいうことを利かない…かなり血を抜かれているらしい。

それでもなんとか、背中をもたれるくらいまで起き上がってみた。

…

外からの声が聞こえなくなった。

ガチャっ。

ミュキの両親と担当医の先生が入ってきた。

ミュキのお母さんは、目を真っ赤にしている。

やはりヒステリックになっていたのは、ミュキのお母さんらしい。

ミュキのお父さんは、緊張しているように見える。

担当医の先生も同じく緊張しているようだった。

ボクはとても嫌な予感が…

ボクは覚悟を決めて、先生に話しかけた。

「…ミュキはどうなったんですか？」

先生はいかにも覚悟を決めていたかのように、いかにも重たく口を開いた。

「…残念ながらミュキさんは…」

僕はここから先の記憶が無かった。

非常にあいまいな記憶しか。

言葉がまず思い出せない。

人の表情だけはなんとか覚えている。

ミュキの両親は黙ったまま。

我慢して泣くのを耐えているようだった。

ミュキのお父さんは、緊張の色を隠せず、ただ硬い顔をしていた。

色々な混乱が僕を襲い、また気を失うように眠ってしまった。

それから何分、いや何時間経ったのであろう。

僕は目を覚ました。

そしてミュキのことを確かめるため、ベッドから起き上がった。

…体が重い…

でも、これは確かめなければ…

なんとかエレベーターのあるところまでたどり着いた。

ここがどこかもわからないのだ。

ミュキのことを聞くのに、受付かナースステーションに行くしか方法がないのだ。

エレベーターはまだ高い階にいる。

まだか、まだかと待っていて、キョロキョロしていると、なんだか不思議に感じる1室があるのを発見した。

…なんだろう？

僕は自然にそちらへと歩いていた。

その部屋のドアには、「親族以外面会謝絶」と、紙が貼ってあった。

そして中からは、聞いたことのある声が聞こえてきていた。

…

…あ……ご…

…

…これから…どうな…

…

…いっしょ…ずっと…

…

なかなか聞き取れない…

僕はもっと耳を澄ましてみた。

…これからの…ミュキ…

！

ミュキ！？

じゃ、この声はミュキのお母さん！？

…

…ミュキを…

…

…あと数ヶ月…

…

…例え植物状態…

…

…最後まで…

…

…

…僕はハッとした。

そして、もうこれ以上聞くことができなかった。

そして僕が寝ていた部屋まで戻った。

ベッドに腰掛け、さっきまで聴こえてきていた言葉をいろいろと考えていた。

「ミュキはもう助からない」

その言葉しか浮かんでこなかった。

…そしてそのまま夜が明け、ミュキの両親から話を直接聞いた。

…

ミュキは現在植物状態であり、長く生きても半年ぐらいであろうとのこと。

ミュキの両親としては、できるだけのことしてもらうために、集中医療室での治療となるため、面会も出来ないこと。

そして…

結果がはっきりした際には、僕に連絡をくれるということであった。

…

僕から見れば、もうミュキには会えないんだ、ミュキはもういないんだ…ということしか考えることが出来なかった。

植物状態の人間が、健常体になる確率の低さを知っているし、また健常体になった人を知らない。

また6ヶ月という医者からの予測が出ているのだ。

もう覚悟は決めていた。

…

そして案の定、6ヶ月と満たずにミュキのお母さんから連絡があった。

…

そしてミュキは、「ボクの手が届かないところ」に行ってしまった。